

『三十番神』： 八百万の神々様の総称

私達日本の祖先は、日本の国土は八百万（やおよろず）の神々様からの御守護を頂き、私達は生かされているという、畏（おそ）れを知る気持ちを持ち合わせて生活してました。そんな気持ちを共有しながら、小さな部落や村単位で、それぞれの土地柄に合わせて、習俗というルールが自然発生的に出来上がっていったようです。それは目には見えない神々様を崇（あが）める事で、自分の気持ちを謙虚に律して、同じ土地に住む村人達と仲良くしていく為に、集団の中から生まれた智慧（ちえ）の集積と言えるでしょう。

そんな先人達が遺（のこ）してくれた智慧の宝庫を顧（かえり）みず、そして忘れ去った結果が、自分本意で心が虚（うつろ）いな私達現代人の姿なのではないでしょうか？

筑波大学名誉教授であり、遺伝子工学の世界的第一人者の村上和雄さんは次の様に述べています：『今回の大地震でやっぱり科学や技術とい

うものの限界を思い知らされた。

これまで私達は科学や技術、データといった目に見えるものばかりを重視してきたけれども、今回は全てのデータを覆（く）つがえすような事が起きたわけですから。それは科学技術が駄目という事ではなく、大自然の方が遙かに凄いんだという事を実感しました。今回の大地震は、日本人全体に対して「もっと謙虚に生きよ」というメッセージなんじゃないかと感じた。「地球に優しいエコ」なんて言っているが、「地球が人間に優しい」んですよ。だから人間の傲慢を今まで許してくれた。しかしそろそろ目を覚ませよ、という意味ではなかなと思ふ』と述べておられます。

大自然の方が遙かに凄い！人智では及ばないという意味ですが、《人智では及ばないもの》は何でしょうか？それは目には見えない《神々様の存在》と言えると思います。

いま私達改めて、「生命」の大切さというものを感じていると思います。そして生かされている事のありがたさ。蛇口をひねれば水が出る。スイッチを入れれば電気が付く。それが当たり前ではないのですね。ややもすれば

私達が忘れてしまう『ありがたい、おかげさま、もったいない』という先人達から絞り出された智慧の集積を、今こそ有り難く受け取る時ではないかと声を大にして申し上げたいのです。

そんな智慧の宝庫である伝統習俗を通じて、一人一人が自分の持ち場で、目に見えない神仏様に感謝しつつ、他者の為に尽くす事によって、他者との絆を深め、そして物質的な豊かさでは見出す事が出来なかった、精神的喜びを見出さねばならぬものと確信致しております。

さて、そこで目に見えない神々様とは一体どの様な存在なのでしょう：？

昔から日本には「八百万（やおよろず）の神々様」という概念がありました。ちゃんと名称が付いておられる神様を数え上げてみても、ざっと七十九もの神々様がおられます。日本の神様には、山や海、火や水、土や金属を現している場合も少なくありません。四季の变化、緑豊かな自然に恵まれた風土に生きて来た日本人は、地上の森羅万象は、神々様によって生み出され、神々様が司っておられると考えてきました。日本の神々様は、その存在の仕方も機能

も自由自在で多彩です。私達は「八百万の神々様」とひとまとめに呼んでいますが、各神様には経歴も活動ぶりも様々です。それぞれ独自の神としての個々を發揮していると言えます。考えてみると神様とは本来、信じる者のあるところにあまねく存在するものではないだろうか？と思えます。

私達の周囲を取り巻く全てのものには命が宿り、また目には見えない神様としての存在を【八百万の神々様】として崇め、奉（たてまつ）ってまいりました。私達の祖先達は、そんな八百万の神々様の中でも、特に格式があり、偉大な神様を総称して【三十番神様（さんじゅうばんじんさま）】と申して信仰してきました。

【三十番神様とは？】

全国には、神々様をお祀りする神社仏閣（じんじやぶつかく）も沢山ありますが、その日本の神々様の中でも、代表格である三十体の神様が存在します。一ヶ月三十日を毎日ご当番（日番）に当てる様に選出された神々様を総称して【三十番神様】と呼びます。

いわゆる神仏習合（しんぶつしゅうごう）

の信仰で、その歴史は、【法華経を布教された伝教大師最澄（でんぎょうだいしさいちよう）】が、仏像として比叡山（ひえいざん）に祀（まつ）られたのが、日本で最初と伝えられており、鎌倉時代には盛んに信仰されるようになってきました。

仏教の中でも最上の教えである『法華経』では、この日本の神々様である【三十番神様】を、とても大切に信仰され今日に至っているのです。

皆様のご家庭にあるお仏壇には過去帳（かこちょう）と言つて、ご先祖様の戒名（かいみょう）が記された小さな本があると思いますが、よく見ると毎日のページの真ん中には、『〇〇大明神』と記してあると思いますが、その一体一体の神様が【三十番神様】なのです。

【日蓮聖人と三十番神様】

建長元年、日蓮聖人二十八歳の時、【比叡山横川（ひえいざんよかわ）の定光院（じようこういん）】で、毎朝沐浴（もくよく）して法華経を唱えておられた時、日蓮聖人の大願に歓喜されて、日蓮聖人を励ます為に現われたのが【法華経守護の三十番神】だったと伝えられております。

えられております。

言い伝えによれば、『日蓮聖人の願いは、一生の間に法華経の教えを理解して、実践していききたいという事でありました。そんな折、不思議な人が現れてお経の声を聞いて去っていききました。次の日も、また次の日も、毎日人が変わって現れ出てこられたというのです。日蓮聖人は、ある日その不思議な人に問いました。「あなた方は一体どなたですか？」するとその方は、「われらは法華経守護の三十番神であります。聖人が大誓願を持って精進されているのを見て、われらは本当に喜んでおります。われらはいつどんな時でも、またどんな所でも、あなたの布教を守護いたします。われらはお釈迦様が【法華経】を説かれた時に、お釈迦様から【法華経】を信じ実践する者を守護せよと、使命をいただいた者であります」と答えた」と伝えられております。

実は、【法華経】が説くところの教えと、私達の祖先達が信仰してきた八百万の神々様への信仰には、共通する考え方が多々あります。数多ある宗教の中で【法華経】を信仰する日蓮宗では、その共通性信仰が現在に至るまで【三十番神様】信仰として、脈々と受け継がれてきているという事実を、檀家信徒の皆様にご承知頂ければ幸いに存じます。

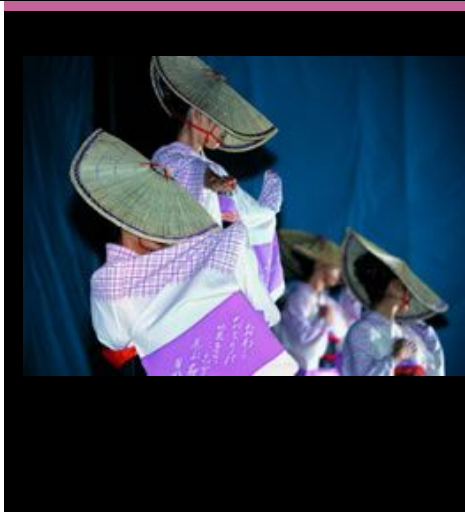
合掌 副住職 谷川寛敬



ちよっといっぴ

おわらの歴史は？

元禄ころからかな！



おわらがいつ始まったのか、明瞭な文献が残っていないためはつきりしません。

「越中婦負郡志」によるおわら節の起源として、元禄十五年（1702）三月、加賀藩から下された「町建御墨付」を八尾の町衆が、町の開祖米屋少兵衛家所有から取り戻した祝いに、三日三晩歌舞音曲無礼講の賑わいで町を練り歩いたのが始まりとされています。

どんな賑わいもおとがめなしと言うことで、春祭りの三日三晩は三味線、太鼓、尺八など鳴り物も賑々しく、俗謡、浄瑠璃などを唄いながら仮装して練り廻りました。これをきっかけに孟蘭盆会（旧暦七月十五日）も歌舞音曲で練り廻るようになります。やがて二十日の風の厄日に風神鎮魂を願う「風の盆」と称する祭りに変化し、九月一日から三日に行うようになったと言われます。